

2	.	業	務	仕	様	の	変	更	を	考	慮	し	た	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	の	運	営	方	法			
2	.	1		仕	様	変	更	管	理	の	仕	組	み	と	運	用											
		私	は	、	業	務	仕	様	の	変	更	に	柔	軟	に	対	応	で	き	る	よ	う	に	下	記		
		の	仕	組	み	を	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	運	営	に	取	り	入	れ	た	。						
2	.	1	.	1		利	用	者	の	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	へ	の	参	画								
		業	務	仕	様	の	変	更	を	極	小	化	す	る	た	め	、	ま	た	は	、	業	務	仕	様		
		の	変	更	を	迅	速	に	把	握	す	る	た	め	に	、	A	社	管	理	部	門	、	シ	ス	テ	
		ム	運	用	部	門	、	現	業	管	理	部	門	な	ど	の	代	表	者	と	週	に	一	度	の	定	
		例	会	議	を	行	う	よ	う	に	A	社	管	理	部	門	に	申	し	入	れ	、	承	認	を	得	
		た	。	ま	た	、	ユ	ー	ザ	イ	ン	タ	ー	フ	ェ	ー	ス	な	ど	、	ユ	ー	ザ	に	直	接	
		か	か	わ	る	部	分	の	仕	様	検	討	に	つ	い	て	は	、	ユ	ー	ザ	の	代	表	者	に	
		参	画	し	て	も	ら	う	様	こ	と	も	合	わ	せ	て	承	認	を	得	た	。	私	は	、	基	
		本	設	計	開	始	後	の	定	例	会	議	か	ら	、	ユ	ー	ザ	に	参	加	し	て	欲	し	い	
		時	期	を	記	述	し	た	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	ス	ケ	ジ	ユ	ー	ル	を	参	加	者	に	説	
		明	す	る	こ	と	で	、	ユ	ー	ザ	部	門	へ	の	事	前	連	絡	と	合	意	に	努	め	た	。
2	.	1	.	2		プ	ロ	ト	タ	イ	ピ	ン	グ	手	法	の	導	入									

	私	は	、	変	更	に	強	い	開	発	プ	ロ	セ	ス	モ	デ	ル	と	し	て	プ	ロ	ト	タ	
	イ	ピ	ン	グ	手	法	を	導	入	し	た	。	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	に	ユ	ー	ザ
	の	参	加	予	定	時	期	ま	で	に	プ	ロ	ト	タ	イ	プ	を	作	成	さ	せ	、	仕	様	の
	確	認	を	進	め	て	い	っ	た	。	私	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	に	仕	様
	確	認	の	際	に	は	専	門	用	語	を	使	用	し	な	い	こ	と	、	業	務	知	識	で	分
	か	ら	な	い	箇	所	が	あ	れ	ば	、	解	っ	た	ふ	り	を	せ	ず	に	素	直	に	質	問
	す	る	事	を	指	示	し	た	。	ま	た	、	ユ	ー	ザ	部	門	に	対	し	て	は	、	適	宜
	質	問	や	要	望	を	出	し	て	も	ら	う	事	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	か	ら
	業	務	知	識	な	ど	に	対	す	る	質	問	を	行	う	場	合	が	あ	る	こ	と	、	の	了
	承	を	得	て	、	不	明	確	な	点	の	早	期	解	決	を	図	れ	る	様	、	ユ	ー	ザ	側
	と	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	が	共	通	の	理	解	に	努	め	た	。				
	2	.	1	.	3		変	更	要	求	に	お	け	る	評	価	方	法							
	私	は	、	個	々	の	仕	様	変	更	に	対	し	て	、	ユ	ー	ザ	部	門	か	ら	見	た	
	変	更	の	緊	急	性	や	効	果	、	変	更	し	な	い	こ	と	に	よ	る	不	便	さ	の	度
	合	い	、	開	発	側	か	ら	見	た	開	発	期	間	や	費	用	へ	の	影	響	な	ど	、	さ
	ま	ざ	ま	な	観	点	か	ら	総	合	的	に	評	価	し	て	、	採	用	の	可	否	を	決	め

る	必	要	が	あ	る	と	考	え	て	い	る	。	そ	の	た	め	、	個	々	の	仕	様	変	更	
に	対	し	て	は	、	ま	ず	A	社	管	理	部	門	の	方	で	最	低	2	週	間	に	1	度	
優	先	順	位	を	付	け	て	も	ら	う	事	や	、	開	発	期	間	内	で	本	当	に	必	要	
な	仕	様	変	更	で	あ	る	か	を	リ	ス	ト	化	し	て	も	ら	う	様	に	要	請	し	た	。
次	に	、	そ	の	リ	ス	ト	を	受	領	し	、	必	要	な	部	分	の	概	算	工	数	と	要	
員	の	ア	サ	イ	ン	メ	ン	ト	も	考	慮	し	て	、	ス	ケ	ジ	ュ	ー	ル	イ	ン	パ	ク	
ト	を	見	積	も	っ	た	。	そ	の	見	積	も	り	を	持	っ	て	、	A	社	管	理	部	門	
と	調	整	し	、	仕	様	変	更	に	お	け	る	費	用	、	ス	ケ	ジ	ュ	ー	ル	の	ト	レ	
ー	ド	オ	フ	を	含	め	て	、	最	終	的	に	、	仕	様	変	更	の	採	用	の	可	否	の	
判	断	を	行	っ	た	。	私	は	、	採	用	さ	れ	た	仕	様	変	更	に	つ	い	て	は	、	
プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	体	制	、	役	割	分	担	表	や	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	ス	ケ	ジ	ュ	
ー	ル	に	適	宜	反	映	し	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	ミ	ー	テ	ィ	ン	グ	の	中	で	、	
開	発	メ	ン	バ	に	変	更	の	周	知	徹	底	を	行	っ	た	。								
2	.	3		特	に	工	夫	し	た	点															
	私	が	特	に	工	夫	し	た	点	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	体	制	の	調	整	で	あ	
る	。	仕	様	変	更	に	お	け	る	急	な	メ	ン	バ	の	作	業	割	り	当	て	の	追	加	

や	変	更	は	、	モ	チ	ベ	ー	シ	ヨ	ン	の	低	下	に	つ	な	が	る	。	私	は	、	A	
社	管	理	部	門	に	相	談	し	、	運	用	部	門	か	ら	当	シ	ス	テ	ム	の	保	守	の	
担	当	者	を	詳	細	設	計	フ	ェ	ー	ズ	か	ら	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	に	ア	サ	イ	ン	
す	る	こ	と	を	要	請	し	た	。	そ	し	て	、	そ	の	担	当	者	を	仕	様	変	更	の	
専	任	者	と	し	て	対	応	し	た	。	開	発	段	階	か	ら	仕	様	の	理	解	に	務	め	
て	も	ら	い	、	円	滑	な	保	守	業	務	を	可	能	に	す	る	た	め	で	あ	る	。		
	私	は	、	プ	ロ	ジ	ェ	ク	ト	メ	ン	バ	に	、	専	任	者	へ	の	早	期	の	ス	キ	
ル	ト	ラ	ン	ス	フ	ァ	ー	も	本	開	発	業	務	の	一	貫	で	あ	る	こ	と	を	伝	え	、
協	力	体	制	の	構	築	に	努	め	た	。														
3		活	動	の	評	価	と	今	後	の	改	善	点												
3	.	1		活	動	の	評	価																	
	私	は	、	仕	様	変	更	対	応	へ	の	仕	組	み	が	全	体	と	し	て	良	好	に	機	
能	し	、	十	分	な	結	果	を	残	せ	た	と	判	断	し	て	い	る	。	た	だ	し	、	以	
下	の	点	は	、	改	善	の	余	地	が	あ	っ	た	と	考	え	て	い	る	。					
3	.	1	.	1		プ	ロ	ト	タ	イ	ピ	ン	グ	手	法	の	導	入							
	ユ	ー	ザ	部	門	と	の	仕	様	確	認	を	行	う	際	、	ユ	ー	ザ	側	で	意	見	が	

分	か	れ	て	仕	様	の	確	定	に	時	間	が	か	か	っ	て	し	ま	っ	た	。	特	に	、	
伺	い	案	件	管	理	サ	ブ	シ	ス	テ	ム	に	つ	い	て	は	、	ユ	ー	ザ	に	よ	っ	て	
シ	ス	テ	ム	開	発	だ	け	取	り	扱	う	も	の	、	I	T	設	備	だ	け	取	り	扱	う	
も	の	、	な	ど	予	算	項	目	に	よ	っ	て	そ	れ	ぞ	れ	異	な	る	要	求	が	あ	り	、
全	体	最	適	と	し	て	の	要	求	の	と	り	ま	と	め	に	時	間	が	か	か	っ	て	し	
ま	っ	た	。																						
3	.	1	.	2		変	更	要	求	に	お	け	る	評	価	方	法								
		仕	様	変	更	全	体	に	つ	い	て	は	、	予	想	し	た	範	囲	に	収	ま	っ	た	の
で	大	き	な	問	題	は	発	生	し	な	か	っ	た	。	し	か	し	、	予	想	外	に	仕	様	
変	更	の	採	用	の	可	否	の	判	断	を	行	う	際	の	、	開	発	メ	ン	バ	の	概	算	
工	数	の	算	出	時	間	が	か	か	っ	て	し	ま	っ	た	。	仕	様	変	更	可	否	の	検	
討	期	間	・	費	用	を	も	っ	と	大	き	く	確	保	す	べ	き	だ	っ	た	。				
3	.	2		今	後	の	改	善	点																
3	.	2	.	1		プ	ロ	ト	タ	イ	ピ	ン	グ	手	法	の	導	入							
		伺	い	案	件	サ	ブ	シ	ス	テ	ム	の	よ	う	な	多	く	の	ユ	ー	ザ	が	関	係	す
る	機	能	の	仕	様	確	認	を	行	う	際	は	、	当	サ	ブ	シ	ス	テ	ム	内	だ	け	で	

仕	様	変	更	が	吸	収	で	き	る	よ	う	な	仕	組	み	を	あ	ら	か	じ	め	組	み	込
む	。	た	と	え	ば	、	デ	ー	タ	領	域	に	フ	レ	ッ	ク	ス	フ	ィ	ー	ル	ド	、	属
性	情	報	を	多	く	用	意	し	て	お	く	。	ま	た	、	仕	様	の	と	り	ま	と	め	役
を	決	め	て	も	ら	い	、	作	業	が	進	め	ら	れ	る	よ	う	に	顧	客	側	へ	の	早
期	の	調	整	を	行	う	。																	
3	.	2	.	2		変	更	要	求	に	お	け	る	評	価	方	法							
	概	算	工	数	の	算	出	に	ど	れ	く	ら	い	時	間	が	か	か	る	の	か	、	開	発
フ	ェ	ー	ズ	毎	、	変	更	規	模	毎	な	ど	あ	る	程	度	パ	タ	ー	ン	化	し	て	開
発	メ	ン	バ	の	意	見	を	参	考	に	し	な	が	ら	早	期	に	理	解	し	て	お	く	。
	そ	し	て	変	更	の	採	用	の	可	否	判	断	の	発	生	時	期	を	予	測	し	、	ス
ケ	ジ	ュ	ー	ル	、	費	用	を	あ	ら	か	じ	め	確	保	し	て	お	く	。				

論文添削結果

2008.10.02 (株) テレコムリサーチ
添削者：佐藤 創

【添削情報】

論文提出者：●●●●●様
問題 : H 1 4 年度 問 2

【免責事項・その他】

本添削結果は、添削者個人の判断によるものであり、所属する会社や組織を代表する意見ではございません。また、本添削結果に即したからといって試験の合格を保証するものではありません。本添削結果の使用の結果生ずるあらゆる損害や被害について添削者は免責されるものとします。本添削結果の著作権は添削者に帰属します。

[目次]

1. 論文見出し構成の例
2. 論述すべき内容
3. 添削結果
4. 講評
 - (1) 添削結果の根拠について
 - (2) 講評の詳細
5. 今後の学習に関するコメント

1. 論文見出し構成の例

以下に添削者が考える、本問題の見出し構成の例を示します。

1. 私が携わったプロジェクトの概要
 1. 1 プロジェクト概要
 1. 2 変更の可能性のある業務仕様と理由
2. 業務仕様の変更を考慮したプロジェクト運営
 2. 1 業務仕様変更へ柔軟に対応するための検討事項
 2. 2 プロジェクト実行中の業務仕様変更への対応
3. 評価と今後の改善点
 3. 1 活動の評価
 3. 2 今後の改善点

2. 論述すべき内容

以下に添削者が考える、問題文から読み取れる題意と、求められる論述内容について、1. 論文見出し構成例に沿って示します。

見出し	論述すべき内容	備考
1. 1	①プロジェクトの特徴、あなたの立場、求められる要件などを明記。 ・プロジェクト概要、プロジェクト体制 ・工期、工数、契約内容、担当工程など ・あなたの立場・役割 ・プロジェクトの制約事項・条件など ⇒今回の論文では、未経験領域のアプリケーションなどの制約条件を論じていくことになるので、この点についての布石を打っておきたい。	本論文は、1. 2に記載する分量が多い。そのため、1. 1は比較的簡潔な記述におさえるとよい。1. 1を400字書いてしまうと、1. 2をまとめるのがつらくなると考えられる。
1. 2	①変更の可能性のある業務仕様とその発生時期を予測していること ⇒業務仕様の変更の可能性が、新しいビジネスモデルの構築などによる未経験領域のアプリケーションであるために発生することを予測していなければならない。ここでプロマネとしての分析力を記述すること。本来は予測した方法まで触れられているべきである。 ②変更の可能性があると判断した理由について述べられていること ⇒ここではプロジェクト状況を加味した上で、プロマネとしての判断力が求められる。また、2章以降の検討内容のベースとなるため、重要な記述である。 ③プロジェクト立ち上げ時点での予測であること ⇒1. 2ではプロジェクト立ち上げ時点で予測されうる事象を取り上げる必要がある。プロジェクトがかなり進行してからしか判断できないような事象を変更の可能性のあることとして取り上げてはいけない。	
2. 1	①1. 2で挙げた仕様変更による影響を小さくするような適切な対策を検討していること ⇒対策の内容が先に挙げた仕様変更による影響を予防するような観点で論じられていなければならない。また、検討した対策が妥当だと考えられる根拠と、施策の予測される効果についても示す必要がある	2. 1ではプロジェクト立ち上げ時点の論述、2. 2ではプロジェクト実行時点の

	<p>る。</p> <p>②プロジェクト立ち上げ時点で検討した対策であること ⇒プロジェクト立ち上げ時点であるため、あまりに緻密な対策は出てこないはずである。適切なレベルの対策であることが必要である。</p>	<p>論述が求められる。</p> <p>2. 1と2. 2は比較的独立性の高い内容であり、直接関連しない論述になりがちである。それでも問題はないが、できれば、2. 1の論述内容に関連するようなストーリーで2. 2を書き進めていきたい。そうすることで、読み手にプロジェクトの状況が伝わりやすくなる。</p>
2. 2	<p>①プロジェクト実行中に発生した変更要求への評価観点を記述すること ⇒変更要求が発行された場合に、適切な評価観点で変更要求の採否を決めているというプロセスを具体的に論じる必要がある。評価観点としては、①利用部門から見た変更の緊急性や効果、②変更しないことによる不便さの度合い、③開発部門から見た期間や費用への影響、などがある。</p> <p>②採用した変更要求に応じてプロジェクト体制やスケジュールなどを調整していること ⇒変更要求の影響を吸収できるようなプロジェクト体制、スケジュールの調整などを行っていること。</p>	
3. 1	①プロジェクトの簡単な顛末と、活動内容について評価すべき点を記述すること	
3. 2	①論述内容に関連する改善点を記述すること	

3. 添削結果

添削者が考える論文評価結果を、A～Dランクに分けて示します。合格はAランクのみです。

評価ランク	内容	判定
B	合格水準にあと一步である	不合格

※A～Dランクの評価内容は以下の通りです。

- A：合格水準にある
- B：合格水準にあと一步である
- C：内容が不十分である
- D：出題の要求から著しく逸脱している

4. 講評

添削者が考える講評について示します。

(1) 添削結果の根拠について

評価ランクがBである理由は以下です。

- ①業務仕様の変更の可能性を抱えつつもプロジェクトを進行させる理由が不明であり、検討内容が妥当なのか判断できない
- ②プロジェクト体制変更における問題提起と対策がアンマッチしているように読み取れる
- ③論文の見出しと記述内容が異なっている箇所がある
- ④論述すべきプロジェクトマネジメント・プロセスが異なっている

(2) 講評の詳細

- ①業務仕様の変更の可能性を抱えつつもプロジェクトを進行させる理由が不明であり、検討内容が妥当なのか判断できない

本問題は、業務仕様が変わらず、プロジェクト運営中に仕様変更が発生することが予想されるプロジェクトについて論述することが求められています。しかし、本論文においては、業務仕様の定義が困難である背景は述べられていますが、業務仕様が変わらないままプロジェクトを進行しなければならなかった理由に触れられておりませんでした。

それもあって、仕様変更を考慮したプロジェクト運営方法の検討内容が、本当に妥当であったのかを読み取ることができませんでした。

上記の内容について、論文中の該当箇所を以下に示します。

(ア)

「1. 2 変更の可能性がある」と予測した業務仕様」において、業務仕様の調整が困難であることは述べられておりますが、なぜ業務仕様が変わらない状態でもプロジェクトを進行しなければならなかったのか、その理由が記述されておりませんでした。

一般的に、業務仕様の定義が容易でないと判断した場合は、業務仕様を早期に定義する

ための対策を打つか、要件定義工程の期間を延長します。つまり業務仕様を定義するまで、以降の工程に進行しないようにします。これは、業務仕様を固めてから進行するプロジェクトですので、本問題にあるような、業務仕様の変更の可能性を抱えたまま（設計工程以降に）進行するプロジェクトではありません。一般的には、要件や仕様定義の工程で業務仕様が二転三転ことを、変更要求とは呼びません。これは「業務仕様の調整、検討」と判断されます。

本論文では、業務仕様が不確かなまま設計工程以降に進行する理由が見当たらないので、その後に検討した内容について本当に妥当な対策であったのかを判断できませんでした。例えば、ビジネス戦略上の理由により短納期であるため、業務仕様不確かなまま見切り発車をしなければならない、などの理由が必要だと考えます。この場合は、納期を延長させることができないので、プロジェクト・メンバを追加投入させたり、ある時期以降の変更要求は段階的にリリースさせていくことをシステム利用者側と合意したりすることなどが、妥当な検討内容となります。つまり、こういったプロジェクト上の制約（理由・原因）が明確でなければ、その後に打った対策が妥当であったのかを評価することができないと考えます。

本問題は、業務仕様不確かなままプロジェクト進行する理由に対して、適切な対策を打っているかを論述させ、そこからプロマネとしての分析能力や判断能力を読み取る問題ですので、この点が論述されていないことは、評価が下がる要素になると考えます。

(イ)

「2. 1. 1 利用者のプロジェクトへの参画」において、利用者側のメンバを定期会議に参加させるという対策を検討しております。確かに、変更要求の早期把握には効果があると考えられますが、これによって「業務仕様の変更を極小化」できるのかは疑問だと考えます。

会議に参加することで、変更要求発生の把握の迅速化、変更要求に関する議論の促進にはなります。しかし、対応しなければならない変更要求が頻発した場合に、プロジェクトの納期・予算・品質へ与える影響を極小化できる施策なのか、その根拠に欠けるように思います。もしその根拠があるのであれば、明確に文章にして論ずるべきだと考えます。この点において論理的な説明がなされておらず、利用者のプロジェクトへの参画が有効な対策であることが判断できませんでした。

(ウ)

「2. 1. 2 プロトタイプ手法の導入」において、プロトタイプ手法が変更に近い開発プロセスであると論じられておりますが、この点において誤りがあるように思います。

プロトタイプ手法は、ユーザインタフェースなどユーザの嗜好などによって仕様変更される可能性のある部分を、実際にユーザが確認可能なプロトタイプを作成して、目で見て判断させる場合に用いられます。また、要求仕様がユーザ側でも不明確である場合などに、開発側が検討案を短い期間に何度も提示することで、ユーザ側の考えや要求を早期に取り入れていく場合に用いられます。つまり、要件定義および仕様定義の早期化を主なメリットとして用いられる手法であり、プロジェクト途中で仕様の変更が発生した場合に、その影響を少なくするような開発プロセスではありません（もちろん、プロジェクト途中で発生した変更要求の内容を、早期に確定させるためには効果がありますが、変更要

求が発生することで与える、納期・予算・品質に対する影響を少なくする効果はないと考えます)。

一般的に変更に強い開発プロセスモデルと呼ばれているのは、スパイラルモデルや成長モデルといった、開発範囲を分割して段階的にリリースするプロセスモデルだと考えられます。何度も開発～リリースのサイクルを繰り返すので、現開発サイクル中に発生した変更要求を、次期開発サイクルに取り込むことができます。こうすることで、現在の開発作業には変更要求の影響が及ばず、変更要求を取り込む次期開発サイクルでは一旦開発の初期プロセスから仕切りなおして検討できるので、手戻り作業などが発生しにくくなります。

プロトタイプング手法について論述されているため、要件定義・仕様定義の加速という対策でしかなく、変更要求が発生した際の手戻り作業などによる、納期・予算・品質への影響を軽減する対策であるように読み取れませんでした。もし、プロトタイプング手法を用いることで、これらの影響を軽減できる根拠があるのであれば、明確に文章にして論ずる必要がありました。

②プロジェクト体制変更における問題提起と対策がアンマッチしているように読み取れる

(ア)

「2. 3 特に工夫した点」において、「仕様変更における作業割当ての急な変更は、メンバーのモチベーションを低下させる」、という問題提起に対して、その対策が「保守メンバーの早期プロジェクト参画による仕様理解の促進」であると文脈上読み取れますが、問題提起と対策の間に、論理的な必然性が感じられませんでした。

なぜ保守メンバーをプロジェクトに早期に参加させることが、プロジェクト・メンバーのモチベーション低下への対策になるのかが文脈上読み取れませんでした。この施策によって、暗に期待する効果などがあるならば、行間を読ませるのではなく、明示的に文章にして論ずるべきだと思います。

③論文の見出しと記述内容が異なっている箇所がある

数箇所ですが、論文の見出しと論述内容がずれていると思える箇所がありました。本番試験でどのように評価されるかは明言できませんが、添削者は読みながら多少の違和感を覚えました。よって、改善したほうが良いと思っております。

(ア)

「2. 1. 2 プロトタイプング手法の導入」において、「私は、プロジェクトメンバーに仕様確認の際には専門用語を使用しないこと・・・」から始まる内容は、直接的にはプロトタイプング手法に関連しない内容であるように感じました。例えば見出しを「仕様確認の迅速化のための検討内容」などとしていけば違和感なく読み進められたのではないかと思います。

(イ)

「3. 1. 1 プロトタイプング手法の導入」と「3. 2. 1 プロトタイプング手法の導入」においては、直接的にプロトタイプング手法の導入に関わらない内容であるように感じました。見出しが相応しくないのではないかと考えます。

④論述すべきプロジェクトマネジメント・プロセスが異なっている

本論文において、「2. 1. 1」と「2. 1. 2」は、プロジェクト立ち上げフェーズでの検討内容を論ずる箇所です（本問題の設問イをお読みください）。しかし、「2. 1. 2」においては、すでにプロジェクトを進行させている中で具体的に指示した内容が記述されているように読み取れます。本来であれば、立ち上げプロセスの段階でプロジェクトの制約条件や特徴を読み取って（推測して）、プロマネらしい予見能力を発揮した対策を論ずるべきです。この点は、期待した論述内容を満たしていないと判断される可能性が高く、評価が下がると考えられます。

5. 今後の学習に関するコメント

添削させて頂いた最初の印象は、非常によく書けている論文だということです。全体的にすっきりとまとまっており、読みやすく感じました。特に「2. 1. 3 変更要求における評価方法」の論述などは的確で要領を得た論述であると感じました。また誤字脱字もほとんどありませんでした。全体的に論文の質は高いと判断いたします。

ただし、もうすこし題意を正確に読み取って、何を書かなければならないのかを把握されるとよいと思います。また、記述している対策が、どんな問題に対してどのような効果があるのか、といった背景と共に論じられれば、更に説得力や経験が豊富であることを感じさせる論文になるのではないかと思います。

以上